

特集「〈日本意識〉の過去・現在・未来」： 日本文化は稲作文化、儒教的集団主義社会 で、中国文明の亜流か？

KREINER, Josef / クライナー, ヨーゼフ

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

137

(終了ページ / End Page)

148

(発行年 / Year)

2015-12-22

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022243>

日本文化は稲作文化、儒教的集団主義社会で、 中国文明の垂流か？

ヨーゼフ・クライナー

はじめに

本論文の目的は、「ウチ」と「ソト」から眺めた日本意識を検討することである。検討に際して、「ソト」から見た日本意識あるいは日本文化のアイデンティティについて、「ソト」から見たからこそ客観的である」と思ってはならない。むしろ、ヨーロッパ人や中国人あるいは韓国人は、「日本はそうあってほしい」と考えて日本意識や日本文化を扱っているのである。そのため、「ソト」から日本を眺める観察者は、ある場合には日本を尊重し、またある場合には日本を軽んずることになる。その意味で、「ソト」の観察者は客観的な視点から日本や日本民族・文化を眺めているのではなく、自らのアイデンティティを確立するための手段の一つとして日本を見ているといえよう。

農村における米飯

江戸の町は、白米を食べられる理想的な場所であった。一方、20世紀半ばまで、米を生産する農家においては、白米を口にすることは減多になかったのも事実である。

筆者が昭和30年代に初めて日本の農村を調査したところ、現地の人々、とりわけ山村の住民は、戦中の米の配給制度を極めて高く評価していた。すなわち、昭和16(1941)年に日米が開戦すると、日本では昭和17(1942)年4月に米の配給制度が導入された。それによって東京などの都市部の住民だけでなく、農村部の人々も米飯を食べられるようになったのであり、今まで口に

する機会の少なかった米飯を食べる契機になった。

ところで、米の配給制度が廃止されたのは昭和 56 (1981) 年のことであった。今では誰も覚えていないともいえるこの配給制度は、実に 39 年にわたって維持されたのである。このことが示すように、日本はいわば国家ぐるみで稲作に取り組んできたのである。

それでは、米の配給制度が導入される以前の農村ではどのくらいの頻度で米飯が食べられていたのであろうか。頻度としては年に数回、しかも村人の誰もが食べられたというわけではなく、選ばれた数人のみが口にできたのである。

例えば、熊本県南阿蘇谷高森町の色見村の飯食(めしく)い祭りでは、稲刈りを終わると神を迎える(図1)。このとき、蓑と傘を身につけて現れるのが田の神であり、田の神の役に選ばれた村の者は、うずたかく盛られた米飯を食べることができた。江戸時代では、村人は争って「株」を買い、米飯を食べる機会を手に入れようとしたのであった。一方、誰もが米飯を口にできる現在では、「あんたがやらなくちゃならん」というように、半ば強制的に田の神の役を決めている。そして、盛られた米飯は半分も食べると満腹してしまうので、残りは他の参加者が分け合うのである。



図1 熊本県阿蘇地方色見村における飯食い祭りの様子(写真は筆者)

日本は稲作文化か？

このような稲や飯は、日本の文化の中心であるという考えをわかりやすくまとめたのは宮本馨太郎（1911-1979）であった。宮本は柳田國男の民俗学研究所の出身であり、後に立教大学で教鞭を執っている。『めし・みそ・はし・わん』（岩崎美術社、1973年）という宮本の著作は、味の素食の文化センターが1979年に開設される以前に、初めて日本の食文化を主題として取り上げたものである。

その中で宮本は、稲、味噌、箸、椀はいずれも中国大陸からもたらされたものであることを指摘し、言外に「日本は中国を中心とする東アジア文化の一員である」ということを示している。

稲は中国大陸、とりわけ揚子江の南から南西諸島、沖縄、そして黒潮に乗って近畿まで北上したという説を唱えたのが柳田國男（1875-1962）であった。すなわち柳田が、大正9（1920）年から大正10（1921）年にかけての初めての沖縄調査の成果をまとめ、大正14（1925）年に出版したのが『海南小記』（大岡山書店）である。

『海南小記』には、大正9年の大晦日の朝、佐多岬に立って南に広がる海を眺める様子などが情緒豊かに描かれている。筆者も佐多岬から南を眺めたが、確かに青い海原の中に黒い流れを認められた。黒潮である。ここから、島から島へと飛び石のように移動し、日本民族の先祖が日本に入ってきたという柳田の考えがよく理解できた。時代は弥生時代の初め、すなわち紀元前500年から300年頃であり、この頃から日本文化が始まるとともに、稲作が日本文化の中心になるとした。石田英一郎は、歴史が変わっても稲作は変わらずに保持されているという意味で「超歴史的」と表現した。すなわち日本文化を定義するには稲作は非常に重大な意味を持っているということであろう。確かに、昭和30年代に農業機械化が進む以前は、手で田を拵え、田植えを行い、手で稲を刈り取り、そして臼と杵で脱穀したが、道具はすべて弥生時代から同じ形状を保っていたのである。まだ、稲作を支える社会構造と信仰概念も、変わることがなかった。

一方、柳田とは異なる立場を示した研究者の一人が坪井洋文（1929-1988）

であった。坪井は昭和 54 (1979) 年に『イモと日本人－民俗文化論の課題』(未来社、1979 年) を著し、新年に餅を供えない「餅なし正月」の風習があることを手掛かりに日本文化を再検討した。「餅なし正月」の例としては熊本県南部の人吉地方が挙げられる。すなわち、人吉地方では雑煮の中に餅ではなくイモを入れるのである。また、人吉地方では、稲作と並び近年まで焼畑を行っている。こうした事例を通して、坪井は稲作文化とは異なる文化の体系が日本に存在することを示したのである。

柳田も宮崎県椎葉村を調査した際(明治 41 年)に、焼畑と猪狩りを目撃している(『後狩詞記－日向国奈須の山村に於て今も行はるゝ猪狩の故実』1909 年)。筆者は、農林官僚であった柳田は、偶然焼畑を目撃したのではなく、焼畑の現状を視察するために意図的に椎葉村を訪問したのではないかと考えている。そして、焼畑や猪狩りについて、これらも日本文化の一つであることを認めている。『海南小記』以降は稲作文化としての日本を検討した柳田は、「稲作文化こそ日本文化である」という立場を、昭和 36 (1961) 年に出版した『海上の道』(筑摩書房)まで維持している。一方、焼畑の存在については、弥生時代以前、すなわち縄文時代の農業の形態が伝えられているとしている。そして、最晩年の著作である『故郷七十年』(のじぎく文庫、1959 年)の中で日本には稲作文化と焼畑文化の二つの系統が存在すると認めているが、稲作文化こそが日本文化そのものであるとする(図 2)。



図 2 熊本県球磨郡の猪狩
(写真は筆者)

天皇の田植えと稲作文化との関わり

現在、日本の内外でよく知られているのが、天皇による田植えの行事である。

天皇の田植えは、毎年日本のテレビや新聞が取り上げるだけでなく、例えばドイツの *Frankfurter Allgemeine* や米国の *New York Times* も写真入りで記事を掲載するなど、「日本の稲作文化を象徴する行事」として広く知られているようである。

しかし、筆者は、初めて田植えの神事に接した時から疑問を抱いていた。何故なら、平安時代の貴族社会において、天皇がみずから田植えをするはずはないと考えていたからである。実際、宗教学者の原田敏明（1893-1983）によれば、聖なるもの（神）と人々（人間）の間の媒介を果たす頭屋、ないし一年神主は、土に触れるとけがれてしまうため、決して土に触れてはならないとされていた。従って、神道の世界観からしても天皇が田植えを行う理由がないのである。

天皇による田植えは、昭和天皇の即位の翌年（1927年）に初めて赤坂御所の御苑内菖蒲池のほとりで行われ、昭和3（1928）年は吹上御苑の生物学研究所の隣で行われたのである。

このように、天皇の田植えは新しく生み出された伝統であることが分かる。その意味で、柳田が『海南小記』で稲作文化を取り上げ始めたのと軌を一にするかのように、天皇自らも日本における稲作文化の重要性を示す田植えの行事を行うようになったのである。

外国人による日本の農村研究

外国人による日本の農村研究の最初の成果は、ジョン・エンブリー（John Embree, 1908-1950）による *Suye Mura*（1939）である。エンブリーは熊本県の人吉盆地の小さな村である須恵村を調査したが、それは稲作の村であった。

そして、戦後になるとエンブリーの研究を踏まえてミシガン大学が昭和25（1950）年から昭和30（1955）年まで岡山県新見地方の農村調査を行い、その成果をまとめ1959年 *Village Japan* を刊行する。しかし、ミシガン大学の調査も稲作を行う農村が対象となっており、焼畑などには注意が払われていなかった。

ところで、天候との兼ね合いもあり、農作業に適した時期は限りがある。そのため、田植えや稲刈りを行う際は、本家と分家が手分けをし、村総出で作業を行う必要がある(図3)。こうした、集団になって共同で作業をすることをヨーロッパ人の視点から取り上げて分析した最初の人物が、元禄時代に来日したエンゲルベルト・ケンペル(Engelbert Kaempfer, 1651-1716)であった。オランダ東インド会社の医師として長崎の出島に滞在したのは元禄3(1690)年から元禄5(1692)年の間のことだった。元禄3年は、奇しくも徳川綱吉が湯島聖堂を建立した年でもあった。将軍が孔子を祀る廟を建立させるということが示すように、17世紀末から徳川幕府は国家イデオロギーとして儒教を用いるようになったのである。



図3 広島県における大田植えの様子(写真は芳賀日出男)

元禄時代は、町人文化が発達し、元禄文化と称される成熟した文化が誕生した時期であった。しかも、日本国内は政情が比較的安定し、戦争も行われなかった。これは、各国が戦争に明け暮れていたヨーロッパに生まれ育ったケンペルにとって理想的な状態と認識された。そして、ケンペルは、日本の社会を「集団主義により、啓蒙された君主が統治する、平和な社会」と考え、その日本観をヨーロッパに紹介した。これは未だに、ヨーロッパにおける日本のイメー

ジの基礎として強く残っているとってよい。

文政6(1823)年に来日したシーボルト(Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796-1866)は日本において膨大な資料を収集し、ヨーロッパに持ち帰ったが、日本人のアイデンティティについて新しい考察を加えることがなかった。そのようなシーボルトも、日本の社会について、「ヨーロッパにみられるほど人々の間に摩擦がない」と指摘し、その理由として「集団主義社会であること」と「人間の行動の規範を細かに定めた儒教が大きな力を持っている」ことを挙げている。

あるいは、ドイツの哲学者のカント(Immanuel Kant, 1724-1804)は『永遠平和のために』(*Zum Ewigen Frieden* 1795年)の中で日本が外国との戦争に巻き込まれていない理由を「鎖国」に求め、各国が対立し、しばしば戦争が起きているヨーロッパ諸国に対して、一刻も早く国を閉ざして平和を求めべきだと指摘している。

一方、戦国時代に日本を訪れたルイス・フロイス(Luís Fróis, 1532-1597)は戦国武将と交流したからこそ、彼が残した『日本史』(*Historia de Iapam*)の中には「日本人は集団主義だ」といった記述がない。むしろ、Japonius Tyrannus、「日本の独裁者」と称された織田信長など、個性が豊かな戦国武将の姿が描かれている。

「啓蒙された君主が統治する集団主義的社会」というケンペルが描く日本の姿を取り上げた一人が、カール・マルクス(Karl Marx, 1818-1883)であった。マルクスは1853年の新聞の記事で初めて「アジア的生産様式」の概念を取り上げている。すなわち、マルクスは、資本主義の前段階においては、社会の中心である農業をより効率的に行うためには、強い権力をもった国家が必要であり、国家に権力が集中する社会というものがアジアにおいて多くみられることを指摘したのである。これは後に、1857年 *Grundrisse der Kritik der politischen Oekonomie* により詳しく一つの学説までにまとめあげている。

ケンペルは儒教を通して中国と日本の親近性をヨーロッパに伝えた。しかし、中国と日本の親近性は次第に中国と日本を同一視する見方に繋がり、マルクスも両国をほぼ同じものとして理解していた。そして、中国、インド、日本という、水田によって耕作し、水利を確保する社会に対して、マルクスは

啓蒙された君主ではなく、権力者が民衆を抑圧する社会であるという考えを示したのである。

マルクスの思想を受け継いだヴィットフォーゲル (Karl August Wittfogel, 1896-1988) は、アジア的生産様式はアジアではなくむしろロシア・ソ連にあるのではないかと批判した。ヴィットフォーゲルは昭和 30 年代に来日し、松田智雄 (1911-1995) が長野県北佐久郡を調査する際に同行し、自らが考える水利社会を目にしたと確信した。

しかし、日本が高度経済成長期に入る昭和 30 年代後半になると、日本は集団主義であるという考えが急速に影を潜め、個人主義が強調されるようになった。そして、昭和 40 年代になると、「シャーマニズム」などに関する単行本の刊行数が増加した (表 1)。

表 1 日本における「占い、占術」「妖怪」「風水」「庚申信仰」「シャーマニズム」「オカルト」「道教」に関する刊行物の推移 (1950-2008 年)

	1950-1959	1960-1969	1970-1979	1980-1989	1990-1999	2000-2008
占い、占術	1	9	26	39	80	89
妖怪	8	11	35	65	148	203
風水	0	1	3	11	97	131
庚申信仰	4	3	5	11	9	3
シャーマニズム	1	1	28	30	57	30
オカルト	0	0	8	21	31	10
道教	9	13	21	33	97	52

* NACSIS データベースによる検索

それでは、こうした単行本の刊行数の変化は何を意味するのだろうか。シャーマンとは非常に個性の強い存在である。このことは、昭和 40 年代に松下電器産業の松下幸之助 (1894-1989) が経済雑誌『プレジデント』にシャーマンとして紹介されていることが示唆するとおりである。すなわち、松下は東京大学法学部の出身ではなく尋常小学校を中退しただけであるにもかかわらず一代で松下電器産業を築き、日本の経済界の中心に位置していたことが、シャーマン、あるいはカリスマ的な存在であると考えられたのであろう。

日本の文化は中国文明の亜流か？

ところで、日本の稲作文化の中には、田の神が冬に家々を訪れる際には、神を迎え入れる儀礼がある。そのような儀礼が雪中田植えや座敷田植えである。

宮本馨太郎も書名とした稲、味噌、箸、椀、あるいは儒教、漢字といったものは、いずれも中国からもたらされたものである。こうした状況を踏まえ、トインビー (Arnold Toynbee, 1889-1975) は、『歴史の研究』(*A Study of History*) 全16巻 (1934-1962)、東アジア文明の本流は中国であり、日本や韓国は亜流であると指摘する。これに対し、日本側からは歴史民族学や考古学の立場から反論が加えられ、岡正雄 (1898-1982) や江上波夫 (1906-2002) などがトインビーの説に対抗した。

岡や江上は、日本にはいくつかの異なる文化が複数の経路によって東アジア大陸からもたらされたことを指摘する。そして、中国から漢字や仏教が流入する6世紀以前に、すでに日本には国家が存在し、社会も分化していたため、もし中国文明がもたらされなかったとしても、日本は独自の文明を築くことができたと主張するのである。岡と江上は旧大陸の古代文明を分析し、いずれの文明も農耕定住民族が騎馬民族によって征服され、支配されるとし日本も全く同じようなプロセスで古代国家が成立したとする。すなわち日本は中国文明の亜流ではなく、日本独自のアイデンティティを形成したと考えたのである。

このアイデンティティに関する議論の中でもっともよく知られているのが、梅棹忠夫 (1920-2010) の生態史観の考えである。昭和32 (1957) 年に論文「文明の生態史観序説」を発表した梅棹は、旧大陸の中央には砂漠が広がり、その両側に旧帝国、すなわち東側には中国とインドが、西側には帝政ロシアとオスマン・トルコが存在する

とした。そして、それぞれの帝国は独力で近代化を実現することができないと指摘する。このような考えは、トインビーだけでなく、ヴィットフォーゲル、さらにはマルクスの思

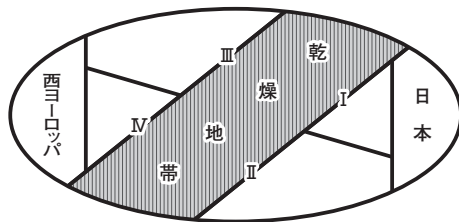


図4 旧大陸の生態史序説の図

想を十分に吟味した上で梅棹が提唱したものである。さらに、梅棹は、旧帝国の両端には、東側に日本が、西側に西洋があり、両者は歴史的な交渉がなかったにもかかわらず内部構造が非常に類似しているとする（図4）。

梅棹がしばしば用いた比喩に「日本文化はクジラである」というものがある。すなわち、クジラは一見すると魚のようであるが、生物学上の分類は哺乳類である。それと同様に、日本も外見上は稲、味噌、箸、椀、あるいは漢字の使用などにより、東アジア文明の一員であるように思われるものの、内部構造の面では西ヨーロッパと極めて似通っているのである。

ところで、ライシャワー（Edwin Reischauer, 1910-1990）が駐日米国大使として着任すると、昭和35（1960）年と昭和36（1961）年に6回にわたり箱根会議を開催した。参加したのは、ジョン・ホール（John Hall, 1916-1996）、ロバート・ベラ（Robert Bellah, 1927-2013）、ロナルド・ドーア（Ronald Dore, b.1925）、マリウス・ジャンセン（Marius Jansen, 1922-2000）、ドナルド・シヴリー（Donald Shively, 1921-2005）らの外国人研究者と、丸山眞男（1914-1996）、加藤周一（1919-2008）、遠山茂樹（1914-2011）、大内力（1918-2009）、高坂正堯（1934-1996）らの日本人であった。箱根会議では日本の独自性や内部からの近代化の実相などが議論された。

おわりに

箱根会議での議論は結論に至らなかった。その代わりに筆者の思うところを述べるなら、日本は時代によって様々なあり方を示しているし、日本意識も時代の変化によって多様である。しかし、重要であるのは、中国や韓国、あるいは西ヨーロッパと共通の点を適切に認識しなければ、実りある議論はできないだろうということである。すなわち、違いに注目して議論を進めるのではなく、まず共通する要素を把握した後に相違点を考える必要があるといえよう。

その意味で、柳田は『遠野物語』の序文で中国も昔話の宝庫であることに言及しているが、共通する要素を満たしてこそ、個別の相違点が明らかになることを示唆しているといえよう。

まさにここに、民俗学や文化人類学が日本意識や日本人のアイデンティティ

を考える際に重要な役割を果たしうる理由が存するのである。

謝辞

文章のテープ起こしは鈴木裕輔さんに大変お世話になり、本文の内容については松野義明様に校訂いただきました。この場をもちまして改めてお礼申し上げます。

<ABSTRACT>

Is Japan a Wet-Rice-Growing Culture, a Confucian Group-Orientated Society, and a Branch of the Chinese Civilization?

Josef KREINER

Japanese self-definition and consciousness and the Western image of Japanese culture and society are much closer and tightly connected to each other than this is the case in any other culture.

At the end of the 17th century, Engelbert Kaempfer envisaged Japan as a Confucian society, thereby linking it implicit with China. One hundred years later, the encyclopaedists lamented the lack of individualism in Japanese society due to the politics of closing the country against the West. In the 19th century Karl Marx spoke of a “asiatische Produktionsweise”, in which also Japan tended to be subsumed. On the side of Japanese folklore studies, Yanagita Kunio and his followers, including ethnologists like Ishida Eiichiro and Nakane Chie, defined Japan as a wet-rice-growing culture, based on a group-orientated village society, despite earlier research on slash-and-burn-agriculture and boar-hunting of non-sedentary “people of the mountains” at the base of Japanese culture.

The folklorist Miyamoto Keitaro wrote of “rice, miso, rice-bowl and chopsticks”, all cultural elements originating in China. Only in the latter half of the 20th century, ethnologist like Oka Masao, and Umesao Tadao as well as the archaeologist Egami Namio opposed that view, formulated for instance by the historian Arnold Toynbee, Japanese high-culture has to be seen as a branch of the Sinic civilization. They on the contrary emphasize the view of a complex, multi-layered Japanese culture, basically entirely different from the Chinese, but these approaches are not yet fully recognized, neither in Japan nor in the Western world.